

## 特集趣旨

川 端 美 季

(立命館大学)

本特集は、フェミニズム研究会企画「『ネオリベラル・ジェンダー秩序』の時代を考える：菊地夏野『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオリベラリズム』合評会」をもとに、編集したものである。この合評会は、2020年10月4日（日）に生存学研究所と立命館大学国際言語文化研究所ジェンダー研究会の共催で開催された。当日、報告者とフェミニズム研究会のメンバーは立命館大学朱雀キャンパスで、他の参加者はオンラインで参加、という方式をとった。

昨今、ジェンダー秩序が以前より見えにくくなっているなかで、フェミニズムに対する批判をどのように考えていくのか、位置づけていくのかといった問題をともに検討するうえで本書『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオリベラリズム』（大月書店、2019年）が重要な書籍だとし、合評会を開催するに至った。

著者は、本書で、ナンシー・フレイザーの理論に依拠しながら、日本の「ネオリベラル・ジェンダー秩序」について論じる。そのうえで、ポストフェミニズム（論）として、「女子力」、「脱原発女子デモ」、「愛国女子」の問題を取り上げている。

本書の冒頭で著者は次のように述べている（菊地[2019：iii]）。

近年の何かが崩れていくような感覚の中で、失われていくものを見極め、新しく何が生まれているのか言葉にしようともがいた跡の連なりともいべきものである。

企画したフェミニズム研究会で事前に読書会をおこなった際に、著者の言葉に対する受け取り方や解釈がメンバー様々にわかる傾向があった。それは、著者が生み出そうとした言葉から、その思考をどのように読み取るか、どのように分析するかということに、メンバーそれぞれの立場性や背景、思考が反映されていたことのあるわけであっただろう。また、菊地が指摘する「失われていく」現状は共有しつつも、「失われていく」あり方に対する認識の違いがあらわれたともいえる。このことは、

著者の議論を受け、私自身も含め各々がどのように言葉にするかを非常に考えさせられる出来事であった。このように、本書は、現状をどのようにとらえ、どのように言語化すべきかということを読み手に問いかけるものであることを示しているのは間違いない。

合評会では、著者の菊地夏野さんから著者解題、田宮遊子さん、堀江有里さん（以下、敬称略）からコメントをしていただいた。そのうえで、著者とコメンテーターとのディスカッション、参加者を含む全体ディスカッションを行った。

合評会プログラムは以下のとおりである（所属・職位は合評会当日のもの）。

### 趣旨説明

著者解題：菊地夏野（名古屋市立大学准教授）

コメント1：田宮遊子（神戸学院大学准教授）

コメント2：堀江有里（立教大学ほか非常勤講師）

菊地さんからのリプライ

オーディエンスを含めた議論

司会：川端美季（立命館大学生存学研究所特別招聘准教授）

当日は、著者とコメンテーターとの間で白熱した議論があり、また参加者からも様々な論点が提示され議論がなされた。

本特集は、合評会でのコメントやリプライ、ディスカッションの記録である。菊地さんの講演録（著者解題）および、田宮さん、堀江さんには、当日のコメントをもとにした原稿を寄せていただいた。それぞれの立場や視点から、異なるアプローチがなされたことが、特集に収められている三者の記録からもわかるのではないだろうか。

なお、『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオリベラリズム』の目次は以下である。

### 第1章 ネオリベラリズムとジェンダーの理論的視座

#### 1 本章の目的

#### 2 新自由主義とは

3 新自由主義とジェンダー	3 ヘイト・スピーチ論からの「慰安婦」問題の消去
4 フェミニズムの社会的再生産論	4 フェミニズムを装う「愛国の慰安婦」表象
5 女性運動・フェミニズムの矛盾	5 ナショナリズム運動における「愛国女子」の誕生
6 最後に	6 ポストフェミニズムと参画型少女シンボル
第2章 日本におけるネオリベラル・ジェンダー秩序	7 ネオリベラル・ジェンダー秩序を批判するフェミニズムへ
1 問題の所在	
2 均等法とジェンダー	
3 男女共同参画社会基本法の意味	
4 女性活躍推進法	
5 展望	
第3章 ポストフェミニズムと日本社会	
——女子力・婚活・男女共同参画	
1 問題の所在	
2 ポストフェミニズムの特徴	
3 日本社会におけるフェミニズムのイメージ	
4 新しいジェンダー・セクシュアリティ秩序	
5 最後に	
第4章 「女子力」とポストフェミニズム	
——大学生アンケート調査から	
1 問題の所在	
2 ポストフェミニズム論について	
3 「女子」に関する研究	
4 アンケート調査の概要	
5 アンケートから見る「女子力」に関する考察	
6 最後に	
第5章 脱原発女子デモから見る日本社会の（ポスト）フェミニズム	
——ストリートとアンダーグラウンドの政治	
1 社会運動とジェンダーの現在	
2 震災／脱原発と「女性」	
3 女子デモの経過	
4 女子という言葉の揺れ	
5 フェミニズムの社会的位置	
6 最後に	
第6章 「慰安婦」問題を覆うネオリベラル・ジェンダー秩序	
——「愛国女子」とポストフェミニズム	
1 問題の所在	
2 鏡としての「慰安婦」問題	

ここで、合評会を企画したフェミニズム研究会について振り返っておきたい。フェミニズム研究会は、2012年より、若手研究者と立命館大学先端総合学術研究科の院生との交流のなかから発足し展開してきた。2012年度に「立命館大学大学院先端総合学術研究科院生プロジェクト」、2013年から2015年度にかけては、生存学研究センター（当時）の若手研究者研究力強化型のプロジェクト、2016年度は、生存学研究センター研究プロジェクト、2017年度には生存学研究センター研究プロジェクトと国際言語文化研究所の萌芽的プロジェクト研究助成プログラムとして展開してきた。いわば、生存学研究所の前身である生存学研究センターと関わりが深く、そのあゆみとともに偶然にも展開してきた研究会でもあった。発足当時や展開の詳細については、『生存学研究センター報告24 抵抗としてのフェミニズム』（2016年）の「はじめに」で堀江有里が記述しているので、そちらも参照されたい。このセンター報告は反響があり、現在、紙ベースでの報告書の在庫はないが、生存学研究所のホームページの「刊行物」からアクセスすることができる。私自身が参加したのは、2015年からであるが、フェミニズム研究会は発足以来、様々なメンバーを迎えながら、現在まで93回にわたる研究会を重ねている（2020年10月現在）。

メンバーのみの研究会とは別に、本特集の合評会を含む公開研究会を、若手研究者をはじめに、多様な立場にたつひと、様々な活動をおこなうひとを招聘し、研究成果の発信の場や研究交流の場をつくり提供してきたことが、フェミニズム研究会の大きな活動と成果のひとつであったといえる。本特集の合評会は12回目の公開研究会であった。

最後に、本特集および合評会は、フェミニズム研究会メンバーや生存学研究科事務局、合評会共催であったジェンダー研究会のメンバーおよび国際言語文化研究所事務局にご協力いただき成立した。改めて、この場を借りてお礼申し上げます。加えて、非常にタイトなスケジュールのなか、合評会および本特集執筆にご尽力いただいた菊地夏野さん、田宮遊子さん、堀江有里さんに厚く感謝いたします。